

## 2024年度(令和6年度)学校経営方針

町田市立小川小学校  
校長 星 彰

## 0 Prologue ~決意~

子どもたちが学校に集う目的について、私は「みんなでハッピーになる」ためであると考え。

これは一つの行動指針であり、換言するならば、哲学者ヘーゲルの言う「自由の相互承認」である。

ヘーゲルは、「お互いを対等で『自由』な存在として認め合うことをルールとした社会を作ること以外に、自由に平和に生きる術はない」と言った。他者の自由を侵害しない限り、どんな価値観や感受性や信仰をもっている、どんな主張や行為をしても「自由」であることを互いに認め合う。

学校が「安心して自分を受け入れてくれる場所」となり、どの子ども、明るく、自分らしくのびのびと、それぞれの存在感を輝かせている。そんな学校にしたい。

上記の考え方を根底にし、「こども基本法」の意見表明権、「町田市子どもにやさしいまち条例(まちだコドマチ条例)2023年12月制定、2024年5月5日施行」を尊重した学校経営を推進する。

加えて、今年度、本校は開校50周年を迎える。これまでの半世紀を振り返るとともに、これからの半世紀、開校100周年に向かって第1歩を踏み出す年でもある。

伝統は守るものではなく創るものである。半世紀の間築き上げてきた伝統にとらわれることなく、これからの50年先の未来を見据えて、今ここに集う子どもたち、教職員、保護者・地域と、新たな伝統を創る1年にすること。それが今の我々に課せられた使命であるという気概をもち、開校50周年ならではのダイナミックな教育活動を展開していく所存である。

## 教育目標

○よく考える子ども

○思いやりのある子ども

○健康な子ども

## 1 Inclusive ~「みんなでハッピーになる」の具現に向けて~

## (1)「こどもの声を聴く」を学校経営の中心に据える。

答えを準備するのではなく、児童の発想を受け止めた上で創り上げていく。「こどもが主役の学校」、「こどもが自分たちの思いを形にできる学校」にする。具体的には、次の取組を行う。

・全校ミーティング(全校MTG)

(木)給食後に、全校児童が縦割り班で体育館に集まり、対話を行う。

※朝に朝会や集会を入れず、毎朝同じルーティンで1校時を始められる時程にした。

給食後に、全校ミーティングと各種集会を、週1回ずつ実施する。

・校長室給食ミーティング

8名前後の児童が、日替わりで、校長と給食を食べる。その際、本校のこれからについて対話を行う。なお、校長室前にはポストを設置し、こどもがいつでも考えを伝えられるようにする。

## (2)「自分の居場所」を複数持てるようにする。

所属する学級だけではなく、異年齢集団(縦割り班)による活動を今まで以上に活性化させる。人は、集まった構成メンバーによって、発揮される力が異なるものである。だからこそ、学級以外にも多くのコミュニティをもち、様々な自分の可能性への気付きを得させたい。

なお、上記の全校ミーティングを縦割り班で実施するのも、このような考えによる。

## 2 Autonomous ~自律した学び手を育む~

## (1)自らの意思で、目標や学び方、学習進度を考え、自らの責任のもとで学習を遂行する力を育む。

自己を振り返り、軌道修正をしながら自らの目標に向かって学び続ける力を育てていく。

具体的な手だてとしては、自由進度学習、反転授業、知識構成型ジグソー法等に示唆を得ながら、児童同士が協働して課題解決を図る授業を創造する。

児童の学びの姿に対して、「知識技能の習得」に着目する以上に、「非認知能力(学び続ける力=挑戦、自己理解、他者受容、協調性、ポジティブ、粘り強さ)」の変容に焦点化し、価値付け・意味付けを行うことにより、自律した学び手を育む。

## (2)「きまりの意識」に関して、時機を見て、全校ミーティングにてその意義を考える。

なぜそのきまりがあるのかに納得せず、「先生に言われたから」という理由だけで守るような他律的な考え方から脱却させる。きまりについて、その背景・理由を考え、児童同士が合意をしながらきまりを見直していくことを通して、自治的集団を育む。

関連して、「学びの構え」についても全校ミーティングで取り上げ、号令や命令を排し、自分たちで自律的に行動できるようにする。

加えて、生活指導の月目標・週目標についても、教師が協議・決定・提示するのではなく、代表委員会児童等がそれを担えるよう、段階的に切り替えていく。

以上の取組を通して、担任に依存しない、児童自らが自主自律の精神で学級を創り上げていけるよう導く。

## (3)ICT を活用した学びを充実させるとともに、情報モラルを育む。

町田市の提供する MNE ポータル、Qubena、学習者用デジタル教科書を十分に活用する。

Canva、padlet、kahoot!、Flip 等の教育アプリに、教師も児童も習熟し、chromebook を、「知識・技能の習得のためのツール」から、「協働的な学び、対話的な学びを実現するためのツール」として活用できるようにする。

そのために、「キーボー島アドベンチャー」の取組を推進し、全学年でタイピングの基礎基本を身に付け、chromebook を「考える道具」として使いこなせるようにする。

情報モラルに関して、児童同士の対話を通して「SNS 学校ルール」を見直すとともに、家庭には児童の自律を目的とした「SNS 家庭ルール」作成の協力を得る。

情報モラルについては、小川高校との連携により、SNS に関する情報モラルを高める取組を計画・実施する。加えて、町田 e スポーツ協会との連携により、ゲーム及びネットリテラシーの向上を図る。

## (4)個別最適な学びを充実させる。

「第3期町田市特別支援教育推進計画」及び「町田市特別支援ハンドブック」に基づき、一人ひとりの特性やニーズに応じた学びを展開する。

特別支援教育コーディネーターを核として、通常の学級とサポートルームとの連携をより一層強化したり、スクールカウンセラーによる心理の専門的知見を活かしたりして、児童の困り感を軽減、改善するための適切な指導及び必要な支援を行う。

特別支援教育アドバイザーによる研修訪問により、組織を挙げて特別支援教育の専門性を高める。

なお、日本語指導を必要とする児童には、「ポケットク」等の翻訳ツールを導入・活用し、児童の学習支援、保護者との円滑な連携を図る。

## (5)生涯を通じて、心も体も健康で、活力ある生活を営むための力(アクティブに生きる力)を育む。

町田市「体力向上推進プラン」に基づいた体育の学習を通して、運動を楽しみ、日常生活に取り入れようとする意欲をもたせるとともに、心と体の健康を大切にできるようにする。

「一校一取組運動」により、運動の楽しさや心地よさを授業以外の活動でも日常的に味わえるようにする。

運動会(Ogawa Sports Fes.)を、縦割り班を基盤とした行事に再編成し、「アクティブに生きる力」を育むための中核となるような取組にする。

町田市「朝食レシピコンテスト」への積極的な参加等、食育をはじめとする健康教育を推進する。

## (6)その他の重点課題についての解決策

・「読書」・・・読書記録アプリ「Yomumo」を導入し、「本をきっかけにこども同士がつながる」体験を通して、興味・関心の幅を広げるとともに、より一層深めることにつなげる。保護者ボランティアによる「おやこ文庫」の取組とも連携を図る。学校図書館の3つの機能(読書センター/学習センター/情報センター)を十分に発揮できるよう環境の改善を図る。

・「英語」・・・「Duolingo for school」を導入し、「継続的に英語に触れる」経験を重ねる。小6のイングリッシュフェスタ、小5のスヌーピーミュージアムの取組での気付きを学校生活に取り入れる。

・「安全」・・・交通安全の意識を高めるための、継続的で粘り強い指導を工夫する。避難訓練(命を守る訓練)について、「予告なし訓練」を増やす等、より実践的な訓練の在り方の検討を進める。

【上記の取組を通して改善する課題(数値は 2023 年度学校評価 A 評価の割合)】  
宿題・家庭学習への取組 31% 読書への取組 25% 英語学習への取組 29%  
きまりの意識 28% あいさつ 27% ネットマナー 12% 運動・スポーツ 35%  
安全意識 27% ICT の活用 31% 食習慣・生活習慣 28%

### 3 Innovator ～イノベーターとしての教師～

#### (1) 目指す教師像

一言で十分に表現することが難しいため、次に箇条書きで示した教師像の総体を、本校における「目指す教師像」とする。

- ・進取の気性に富んだ教師
- ・確かな時代認識の下、今のこどもが活躍する20年先の未来につながる学びを創ろうとする教師
- ・こどもに、「関心・感動・感謝」のできる教師
- ・「教える専門家」から「ともに育つ専門家」になろうとする教師
- ・哲学者ヘルバルトの言う「出会いの音階」を即座に調整できる教師
- ・教師の語りかける言葉の重みを自覚し、こどもが伸びていける温かい言葉かけができる教師
- ・一部の児童だけで授業を進めることに、胸の痛みを感じられる教師
- ・誰一人見捨てず、一人残らず全員で育ち合うことに挑む教師

#### (2) 「チーム担任制」により、複数の教師で、一人ひとりの児童のよさを見出し共有する。

「チーム担任制」とは、学級担任を一人に固定せず、複数の教員がチームとなり、担任業務をローテーションして運営することと定義する。授業についても、学級を固定して指導する教科もあるが、一部教科担任をしたり、合同授業にしたりして、チームで学年全員の児童を育む。

具体的には、次の通り運用する。

- ・1週間ごとに担任業務を交代で行う。※担任業務とは主に朝の会、給食・掃除、帰りの会等を指す。  
2学級の場合(1,2,4,6年生)…従来の学級担任2名+専科1名の計3名で交代して行う。  
3学級の場合(3,5年生)…従来の学級担任3名で交代して行う。

- ・授業は一部教科担任制とする。

どの教科を一部担任制とするかは、学年の状況によるが、例えば2学級の場合、1名の教員が2学級分の社会の授業を行い、もう1名が2学級分の理科の授業を行う、というようにする。

具体的には、次のようなメリットがあると考える。

- ・多くの視点で児童の変化を見取ることで、一人ひとりの児童を的確かつ多面的に理解できる。
- ・人間関係に流動性をもたせることで、開放的で透明性の高いオープンな学級経営ができる。
- ・学級間の格差が平準化・均質化される。
- ・児童の変化に気付く機会が増え、早期かつ丁寧な対応ができる。
- ・複数の教員と関わることが、児童の価値観や世界観を拓げる。
- ・児童、保護者にとって、相談できる教職員が増え、安心感が高まる。
- ・児童は担任頼みの依存的な態度を取りにくくなり、主体性や自立を育む契機となり得る。

#### (3) OJT を計画的に実施し、日々の授業改善を図る。

自己申告の機会等を活用し、全員、年3回以上の校内教員対象の授業公開を実施する。その際、町田市教育委員会「授業をデザインする8つの取組」の視点に基づいた授業改善を図る。

一人ひとりの教員が、強みを生かした OJT を実施できるよう計画し、教員同士で高め合い、それぞれが自己実現を図れるような組織にする。

#### (4) 「いじめを防ぐ・いじめに気付く・いじめから守る」ことのできる教職員組織を確立する。

「学校いじめ防止年間計画」に基づき、例えば、次のような取組を確実に実施する。

- ・「いじめ防止対策推進法」の児童への周知
- ・町田市提供 いじめ匿名連絡サイト「スクールサイン」の全児童への周知
- ・年3回のいじめ防止に関する授業
- ・こども自身が主体的に考え発信するいじめ防止の取組
- ・いじめが起こりにくい開かれた学校環境及び清潔、快適で美しい環境の整備

「学校いじめ対応チーム」定例会を月1回から週1回の実施に改めるとともに、必要な時には躊躇せず臨時会を開催し、教職員組織でいじめの根絶に挑む。

「いじめは必ず起こる」という意識をもち、その片鱗を見逃さずに組織を挙げて対応を進め、「いじめの重大事態ゼロ」、「いじめの未解決ゼロ」を完遂する。

【上記の取組を通して改善する課題(数値は2023年度学校評価A評価の割合)】  
いじめ・人権感覚 29% 校内整備・校内美化 29%

## 4 Locality ～地域とともにある学校～

### (1)PDCA サイクル及びOODA ループによる学校改善と情報発信

コミュニティスクールとして、学校管理職は、年4回の学校運営協議会を生かした PDCA サイクルを回し、学校経営上の問題点の特定や改善策の検討を図る。

教職員は、保護者と教職員の会(保護教)や地域の方々をはじめ、関係機関との日常的な連携を通してOODA ループを回し、各教育活動の改善をスピード感をもって推進する。

なお、これらの改善を推進するためには、本校の取組を積極的に発信する必要がある。ホームページを中心とした情報発信に努め、「開かれた学校」となるよう努める。

### (2)地域から学ぶ、地域で学ぶ

地域を「学校」「学習材」と捉え、キャリア教育との関連も視野に入れながら、多くの人と関わり、多様な価値観との出会いを栄養にする「人を浴びる」教育を展開する。

具体的には、次のような方々との連携を進める。

- ・地域にお住まいの方々(通学時の旗振りボランティア、田んぼ学習ゲスト等)
- ・保護者と教職員の会(保護教)
- ・近隣の幼稚園・保育園、近隣の小・中学校
- ・小川高校(情報モラル教育等)、都立町田の丘学園(特別支援教育)、玉川大学(TAP)
- ・放課後子ども教室(まちとも)、学童、子どもセンターばあん
- ・町田警察署、町田市子ども家庭支援センター
- ・地域に根ざす企業や団体、公共施設

なお、災害時の地域との連携協力体制についても、地域と学校、相互に確認を行う。

【上記の取組を通して改善する課題(数値は 2023 年度学校評価 A 評価の割合)】  
地域人材の活用 24% 地域・学校の一体化 31% 情報発信 37% 他校連携 9%

## 5 Sustainability ～サステナブルな働き方～

### (1)「教員の働き方」から捉えた「チーム担任制」の推進

※以下は私の経験則から抱いた課題意識であり、あくまで学級担任制の一側面であることを予め確認しておく。

従来の学級担任制は、往々にして「自分の学級の一切に責任をもつべき」という意識を生む。それは、学級独自のルールを生んだり、隣の学級にかかわることを「越権行為」に感じてしまったり、場合によっては、他の教員からどう見られるかを基準に、学習規律を過度に求めてしまう事態も生じることがある。

学級担任の業務は、ワンオペレーション&マルチタスクであり、それに上記の意識が加わることで、教員の孤立化が進んでしまう。

「チーム担任制」は、学級担任1人に責任を負わせない。「隣のクラス」という“垣根”をなくし、複数の教員で一人一人の児童を見るシステムである。

ここでは、教員にとってのメリットを次に示す。

- ・日々の情報共有を通して教員が自分だけで悩みを抱え込まなくなり、精神的負担が軽減される。
- ・互いの「弱み」を「強み」で補い合う、柔軟かつ強固な教職員組織となる。
- ・経験の浅い教員に対する研修効果が期待できる。
- ・教科担任等の工夫により、業務の平準化・標準化が図られる。

### (2)校務 DX(デジタル・トランスフォーメーション)の深化を図る。

現時点で多くの校務をデジタルに変換しており、教員用 chromebook 端末内で校務を進めることが可能になっている。これをより一層洗練させ、働きやすさにつなげる。加えて、本校のシステムの保守・運用を一部の教員が担うのではなく、多くの教員が担えるよう、OJT を推進する。

### (3)先生＝「先ず生き生き」を実現する。

年度当初の保護者会にて、教職員の勤務時間について明示し、平常時は、勤務時間に合わせた留守番電話の設定について依頼をした。同時に「教職員の悪口をこどもの前で言わないでほしい。たとえこどもが言ってきたも一緒になって言わないでほしい。」と依頼するとともに、「すぐに学校に教えてほしい。学校で必ず解決につなげる。」とも約束をした。

教員の教材研究の時間を十分に確保するとともに、こどもとの信頼関係を着実に築き上げるために、保護者と協力し、先生＝「先ず生き生き」を実現し、一人も欠けることなく、年度末を迎える。